

幕末明治の写真師列伝 第十八回 下岡蓮杖 その十七

文久2年(1862)8月21日の生麦事件後も弁天通五丁目横町の久之助(蓮杖)の店(師岡屋伊兵衛の家作)は繁盛していたのだが、慶応元年(1865)惜しくも一身上の都合から一旦店を閉じて、久之助(蓮杖)は妻子を連れて下田に帰省することにした。

久之助(蓮杖)の妻・美津は安政6年(1859)、最初の子供(男の子)を産んだが、その子は数日して亡くなってしまったので、後述するが気落ちした美津のために同日同時刻に生れた養子を貰い、その子に太郎次郎という名を付けて育てていたが、美津の産後の肥立ちがはかばかしくなく、美津は健康を害していた。そのため医師に美津の体を診て貰ったところ、心身過労だからしばらくの間、転地して静かに暮らした方が良くと言われていた。そこで久之助(蓮杖)は美津とも充分話し合っ、繁盛している写真館をこのまま閉めてしまうことも残念には思ったが、美津の健康には代えられないと、一度夫婦の故郷でもある下田に移り住むことにしたのだった。

この下田時代に写真技術習得のため度々、久之助(蓮杖)の家を訪ねて、その弟子となったのが、親族の臼井重蔵(後の臼井秀三郎、臼井蓮節)、桜田安太郎で、下田の船田万太夫もそうであった。船田万太夫は屋号を「阿波屋」と称し、後日、初代から三代目まで下田で旅館兼写真館を営業していたが、その後廃業してしまい、平成の現在ではその場所(下田商工会議所前)も有料駐車場となってしまった。

久之助(蓮杖)は桜田家の三男であったため、幼い頃に桜田家から同じ下田の岡方村の土屋善助のところへ養子に出されたのだが、幼い頃より画を好み、土屋家を出て江戸に行ってしまったことから、土屋家を継ぐことにはならなかったのだが、下田に帰省した折に、「下田」の「下」と「岡方村」の「岡」の文字を取って、今後は姓を「下岡」と名乗ることとした。(この時までには本名・桜田久之助、嘉永6年(1853)2月よりは自称・桜田蓮杖であった)「下岡蓮杖」の誕生である。(以後、この稿も久之助(蓮杖)を下岡蓮杖あるいは蓮杖と書くこととする)

蓮杖、美津、太郎次郎の親子がさしあたって下田で頼る所は、蓮杖の実家である桜田家(長男・桜田与惣右衛門家、後に桜田幸吉が継ぐ)や姉・さだが嫁いだ前田家(前田所左衛門家)であったが、どちらの家も下田伊勢町の大火災にあって被災、焼失しており、妹・ふくの嫁ぎ先の臼井家(臼井吉蔵家)も手狭だったため、池之町にある妻・美津の実家(池之町香取屋(臼井伝八家))にしばらく寄寓することにした。とはいえ、いつまでも妻の実家にいるわけにはいかない。そこでちょうど下田の岡方と殿小路との境の所が畑になっていた土地があり、この土地83坪を買い求めて、ここに新しい寓居を設えることにした。(現在の下田、菊池内科小児科医院玄関前の駐車場の辺り)この新居は蓮杖らしい工夫があって、その一つはどの座敷からも廊下を通して奥の便所に行けたことと、もう一つは玄関入口に入って普通はその土間から奥の裏口まで通している家が多いのだが、その土間を暗室にしていたのが特徴だった。また、この他に写真スタジオ兼土産物屋として別に家を借り受けて、撮影はそこで行われていた。(現在の森斧黒船社、森斧氏自宅の左隣り、洋装店及び奥のアパートのある敷地がそうであった)

この下田時代の蓮杖の逸話(後年、孫の尾形奈美が祖父・蓮杖から聞いた話)としては、「今後これからは、何か動くものを写したい。それには一瞬のうちに感光

する材料が必要となる。そうしたものは必ずそのうちに見つかるであろうし、また発見しなければならぬ。」と、蓮杖は言っていたそうである。

慶応2年(1866)9月6日、蓮杖の実子・東太郎誕生、翌慶応3年(1867)には長女・よし(このよしが嫁いだのが尾形乾山で、その長女が尾形奈美)が生まれている。

慶応3年(1867)、再び蓮杖は横浜に戻り、今度は馬車太田町角駒形橋の東詰(現在の中区太田町5丁目77番地東角)に家屋を建築して写真館を再開業し、「一夜夢に、富士山聳え、其下に茅屋あり、大樹傍らに生じ、一壺あり、其中央に懸り蛇ありて壺を窺ふ」という夢を見て、目覚めるとこれを奇として、この時見た夢を画として写真館の新しい商標とした。これが写真台紙裏側でよく見られる蓮杖の石版の印章(RENJIO YOKOHAMA 濱横 斎杖蓮)である。蓮杖は、弁天通五丁目横浜時代にも写真を入れる紙袋にこのモチーフと同じデザインの商品を使用しているが、今回の商標は以前のものをもう少し簡略化したデザインとした。また同様に富士山を型取った「PHOTOGRAPHER RENJIO'S BRNCH HOUSE」と英文字で書いた看板を角店の軒先の、二階の角に掲げて、その左には「全楽堂」、右には「相影楼」の額を角店の左右に掲げた。白抜きに○に「太」の文字を入れた暖簾には、これもまた白抜きで右手に「ふじや」左手に「不二屋」と号した文字を入れた。店の一階は、地本、錦絵及び小間物店とし、そのため店先の設置看板に「錦絵所」と目立つように置き、二階の軒下に「PICTURES JAPAN UP STAIRS」と別の看板を掲げて二階が撮影場だとよく判るようにした。

看板を店に掲げたちょうどその日、アメリカの宣教師が来てこれを見て、「古昔西洋開の始め蛇あり、人類に業を教へたりと伝へ、今日に至るまで業を以て業を営む者は好て蛇形を用ふ、顧ふに卿の業も益々榮ふるならんと。」(『写真事歴』)と呟いた。このことは全くの偶然のことであったが、蓮杖の写真館はこれより日を追って隆盛を極めたのは奇というべきであろう。

明治元年(1868)1月3日、蓮杖は弁天通り二丁目横通り(南仲通り寄り)にも新しい支店の写真館を開設した。ところが、この弁天通り二丁目横通りの方の写真館は、大いに繁盛しているうちに、明治3年(1870)12月に近所の風呂屋から出火した火災にあって類焼してしまった。幸いにも石倉にあった写真器材などは延焼を免れて、そこで今度はさらに撮影設備を完全にした新しい写真館を新築することにして、この弁天通り二丁目横通りの店の方を本店とし、再開業することにした。この時に馬車道にあった写真館の方は今度は馬車道支店にしている。幸いにもこの本店の写真館では、当初より客も日々集まり、まだ開店前から日没まで客が多く集まって来るような有様であった。このころの客としては、力士の雲竜、不知火、両国、朝日嶽や、俳優の助高屋高助、尾上多賀之丞などの輩が度々、蓮杖の写真館に訪れて最上客となってくれた。

蓮杖の最初の弟子は横山松三郎だが、次に親族の臼井重蔵(後の臼井秀三郎)、桜田安太郎で、下田の船田万太夫、初代鈴木真一、岡本圭三(後の二代目・鈴木真一)、江崎礼二、*滝本平三郎、*四身清七、*桜井初太郎、*平井玄章、*西山礼助などがそうであった。(印の五人については詳細不明)

(森重和雄)